一生成香 No14「識字率向上月間に寄せて」

研修リーダー　菊地　平

今月は識字率向上月間ですから、このことについて触れてみます。

今の私たちには考えられないことですが、現在、世界の子供たちで学校教育を満足に受けられない数が余りに多いのに驚かされます。

RI の国際識字年の目標は 2015 年までに世界の子供が漏れなく初等教育をうけられるようにすることを目指していました。国連によりますと、読み書きの出来ない人は世界に 20 億人いると言います。実に世界で 3 人に 1 人は貧困から抜け道が無いに等しいということです。それはまた、地球人口の 3 分の 1 の人が本や新聞や雑誌を読むという素朴な喜びから締め出されているということなのです。

　そのために、このような病院では、職員が洗浄剤のラベルを読み間違えるために、危険なことが日常的に起こっていて、珍しいことではないということです。

　今、サハラ以南のアフリカなど、第 3 世界を中心に世界中で学童期にある子供の内、1 億 2,500 万人が全く学校に通っておらず、さらに。1 億 5,000 万人は基本的な読み書きが出来ないうちに学校から離れてしまっている環境にいるといわれています。

　難民救済の支援活動をされている、曾野綾子さんが、かつて、こう話されていました。「支援活動に鉛筆を沢山頂きますが、エンピツを削るナイフが無いのです。ボールペンの方がはるかに有効なのです」と。非識字と貧困は悲惨な悪循環を生み出しているのだと思います。

RI の目標達成には、世界で年間 80 億ドルの教育予算が必要とされていますが、この年間80億ドルという金額は、世界の軍事費のたった 4 日分と言われています。

ノーベル平和賞受賞のマララさんが「なぜ戦車をつくることは簡単で、学校を作ることは何故難しいのか？」と訴えたことを思います。

ここ日本にあって、つくづく平和の有難さを思うと同時に、平和への願いを祈らずにはいられません。

　我が国の識字率の歴史を見ますと 740 年頃、天平の頃で、大化の改新終り、壬申の乱静まり、古事記が書かれた頃です。字の書ける人は京で 1 戸に 1 人いたそうです。全国では郡司の役所に勤めている者だけで、庶民は読み書きが出来なかったといわれています。「三下り半」という言葉があります、夫から妻、または妻の父兄宛に当てた離縁申し渡し状を三行半で書く慣わしであったことから来ています。一般には字が読み書き出来なかったので三行半の棒線を書くことから、三下り半といわれたわけです。

ヨーロッパでもフランス革命の頃、結婚の署名の出来たのは三分の一ぐらいの男女だったといわれています。

日本の約 400 年前、豊臣秀吉の頃、島津藩によって朝鮮から連れてこられた 30 人余りの陶工の人は、ほとんどの人が字を書けて、その事によって日記が残って歴史を伝えています。識字とは大変な文化なのです。

世界の識字率のテーマは、水保全問題とともに、ポリオに次ぐ RI の重要なプログラムであることを、承知しましょう。

私がガバナーエレクトとして、アナハイムの国際協議会での研修期間中のことです。「終日ボランティアをしていただきます」との指示があり、世界から集まった ５００人のエレクトはジャンパー姿になり、フードバンクと言う大倉庫に移動しました。そこには食料品が山済みされていました。その食料品がコンベアで流れてきます、それを、ロータリーマークの袋に一心に汗して入れる作業でした。
～多分世界の飢餓に苦しむ人達の一時の癒しになったでしょうか？

５００人の夫人たちは前もって送っておいた子供向けの本を一冊ずつ、ロータリーマークのシールを貼っての箱積め作業でした。
その日の昼食は、コッペパン 1 個と小さな缶ジュース１個だけの粗食でした。

それによって「浮かされた昼食費が財団に寄付される」というボランティア研修を経験しましたが。日本語の子供本は何処の国へ配布されたのでしょうか？

絵本が主でしたから、きっと世界の、恵まれない、字の読めない子供達には貴重なプレゼントになったと思います。